

# 幼児の外遊びに関する一考察

竹安 知枝

## 1. はじめに

子どもの運動能力は、昭和 60 年ごろから現在にいたるまで低下傾向にあることが、文部科学省が行っている「体力・運動能力調査」<sup>1)</sup>によって明らかにされており、また、幼児の運動能力は、身体活動量と関連していることも明らかにされている<sup>2)</sup>。

子どもの身体活動量の減少は、生活習慣に影響を与え、さらに生活習慣は、子どもの気力・学習意欲などにも影響を与えることが指摘されている<sup>3)</sup>。

子どもたちの外遊びが減少している背景には、社会や生活環境の変化<sup>4)</sup>が挙げられる。具体的には、少子化・テレビゲームの普及・犯罪の増加・空き地の減少、塾や習い事に通う子どもの増加などが挙げられる。それらにより、遊びも大きく変容してきたといえる。

白石<sup>5)</sup>は運動神経をよくする第一期として全ての運動形態がでそろう 1~5 歳を挙げており、幼児期は、運動の基本的な形態をほぼ習得することから、幼児期における適切な運動経験の積み重ねは、運動発達において極めて重要であると言える。

また、最近は、肥満の子どもたちが増加傾向にあることが危惧される。肥満傾向にある幼児の運動能力が低い水準であることは、つとに明らかにされている<sup>6)</sup>。

運動神経も肥満も遺伝以外の後天的な要因が大きく影響すると考えられており<sup>7)</sup>、幼児期の肥満とその後の肥満についての関

連性も指摘されている<sup>8)</sup>。子どもの身体活動量の減少は、子どもの体力・体格などに様々な影響を及ぼすことから、子どもの遊びに着眼し、そして、子どもの社会性の発達に影響を与えるとされる集団遊びの重要性についても着目した。

子どもの集団遊びについての先行研究において、ルールのある集団遊びや競い合う遊び、課題を克服する遊びは、運動発達を促進させるということが明らかになっている<sup>9)</sup>。そこで本研究では、子どもの遊びの重要性について考え、また子どもの遊びの現状を把握するためにアンケート調査を実施し、考察することにした。

## 2. 遊びの重要性

遊びは、教育的観点からどのように示されているのだろうか。

幼稚園教育要領(2008)<sup>10)</sup>においては、「十分に体を動かす気持ちよさを体感し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること」と記されている。また、保育所保育指針(2008)<sup>11)</sup>でも、体力づくりのために日常的な遊びや運動遊びの必要性が述べられており、子どもの運動や遊びについて、重要視していることが読み取れる。

そして、平成 20 年改訂の小学校学習指導要領解説体育編<sup>12)</sup>における運動領域(低学年)では、全領域で遊びという言葉、あるいはその内容のものが組み込まれている。

平成 10 年改訂の小学校学習指導要領の

運動領域（体育科の領域構成）では全学年・全領域において、直接的に遊びという言葉を用いていないが、例示としては、遊びについて述べている。先行研究においても、低学年の体育科の実践では、「遊び」という概念を取り入れることの重要性について指摘されている<sup>13)</sup>。それらのことから、教育において運動遊びや遊びの概念が、重視されているということは確かである。

また、柴谷ら<sup>14)</sup>は、「遊びの最も重要な価値は、「人間」や「生き方」を自然に学習させる点にある。しかし、現代の日本には、まるで遊びを勉強の敵でもあるかのように考えている親が少なくない。わが子をなるべく遊ばせないように仕向けるような親、わが子から遊びを奪い去るような親は、これらの大変なものを学習するまたとないチャンスをわが子からとり上げてしまうことになる。子どもが問題のある子どものなる原因是、けっして単純ではないが、遊び不足がその有力な原因の1つであることは、たしかである。」と述べ、柴谷らは、子どもの人間性を養っていくためには、遊びが非常に重要であると考えている。

そして、柴谷ら<sup>15)</sup>は、「からだを動かして、五つの感覚を働かせながら全身をこめて遊ぶとき、いろいろなことを学習し、遊びの行動の中で、自分のイメージを検証する。文字や数や理科的法則といった概念的知識の教え込みは、幼児の思考能力を高めはしない。からだとイメージを働かせて、遊びのなかでどう豊かな体験を積みあげていくか、幼児の思考の発達はかかっている。」としており、柴谷らは、体を動かし五感を刺激しながら遊ぶことの重要性について、述べている。

次に集団で遊ぶことと異年齢の子どもと遊ぶことの意味について考えてみたい。

子どもは集団で遊ぶことで、我慢をしたり、他の子どもと協力や競争をしたり、時にはケンカや仲直りをしたりする経験を通して、さまざまなことを学び、自分以外の人も、自分と同じように感情や欲求をもっているということが理解できるようになる。

そして、異年齢の子どもと遊ぶことの意味について考えてみると、異年齢の子どもと遊ぶことは、年下の子どもにとっては、いろいろな遊びを知っている年上の子どもたちがとても魅力的に映る。また年上の子どもたちを目標にしたり、真似をして遊んだりする中で、多くのことを学んでいく。そして、年上の子どもにとっては、年下の子どもと触れ合することで、自分の過去を振り返り、自分の成長が自覚できる。また、年下の子どもの面倒を見たり、遊びを教えてたりしていく中で、年上の子どもの責任感が養われていく。したがって、異年齢による子どもたちの遊びは、相互に刺激を与えることから、大きな意味をもつと考えられる。

### 3. 子どもの遊びの現状

次に、子どもたちの遊びの現状を調べるために、大阪府大阪市内の私立幼稚園の年長児33名と兵庫県姫路市内の公立幼稚園の年長児40名、計73名（男児34名、女児39名）の園児の保護者を対象に遊びに関するアンケート調査（2011年の2月と6月）を実施した。表1は、その調査結果（全体73名中、普段室内遊びを中心しているか、もしくは外遊びを中心しているかのいずれかに分類された男児19名、女児22名に

着目した)について示したものである。

表1. 子どもたちの普段の遊び（室内遊び・外遊びをする子どもの割合）

大阪市と姫路市の年長児	室内遊び中心（男女別の全体における割合）	外遊び中心（男女別の全体における割合）
男児	10名 (29.4%)	9名 (26.4%)
女児	18名 (46.1%)	4名 (10.2%)

表1の「室内遊び中心」あるいは「外遊び中心」という分類方法については、保護者に対するアンケート調査の質問項目において、「普段よくする遊び（主な3つ）」を答えてもらったが、3つ全ての遊びが「室内遊び」と記入されていた場合（あるいは、室内遊びしか上げていなかった場合）は、「室内遊び中心」とした。そして、3つ全ての遊びが「外遊び」と記入されていた場合（あるいは、外遊びしか上げていなかった場合）は「外遊び中心」というように分類した（室内遊びと外遊びが混在していた場合は、どちらにも含めていない）。室内遊びでは、人形遊び・お絵かき・ままごと・塗り絵・折り紙・テレビゲームが主に挙げられていた。また、外遊びの具体的な種類では、自転車・ボール遊び（ドッジボール・サッカー・野球など）・鬼ごっこ・公園遊具・縄跳び・虫捕りなどが主に挙げられていた。室内遊び中心群と外遊び中心群とで

は、男女ともに室内遊び中心群の割合の方が高かった。次に男女で比較すると、女児の方が室内遊びを好んでしていることがわかる。また、女児では、室内遊び中心群の割合は、外遊び中心群の4倍以上であった。

#### 4. 幼少期の頃の遊び（現在の大学生）

次に、現在の大学生（女子）に実施した、幼少期の頃の遊びに関するアンケート調査（2012年10月）の結果を示すことにする（ここでの「幼少期」とは、小学校を卒業するまでの期間で考えている）。対象は、兵庫県内の4年制女子大学1校（神戸市）と女子短期大学1校（尼崎市）、両校合わせて103名（1年生50名、2年生53名）であり、「幼少期に一番好きだった（よくした）遊び」について質問した。表2は、その回答を遊びの種類ごとにまとめた（多く挙げられていた遊びを上位12種類示した）ものである。

表2. 幼少期に一番好きだった遊び（上位12種類）

遊びの種類	人数（全体での割合）	遊びの種類	人数（全体での割合）
鬼ごっこ	26名 (25.2%)	友だちと話す	3名 (2.9%)
ドッジボール	21名 (20.3%)	ままごと	3名 (2.9%)
ケイドロ	13名 (12.6%)	バドミントン	3名 (2.9%)
一輪車	7名 (6.8%)	お絵かき	2名 (1.9%)
ボール遊び(ドッジボール以外)	7名 (6.8%)	テレビゲーム	2名 (1.9%)
公園の遊具で遊ぶ	4名 (3.8%)	縄跳び	2名 (1.9%)

大半の学生が幼少期に一番好きだった（よくした）遊びが、友だち（集団）で遊ぶ種類のものを挙げていたが、全体 103 名中 22 名（21.3%）の学生は、基本的に友だち（集団）で遊ぶような種類のものを選んでいなかった。また、表 2 に挙げた上位 12 種類の遊びで、外遊びは 8 種類であり、他の 4 種類の遊びは、一般的に室内で遊ぶものであった。

## 5. まとめ

外遊び（運動遊び）をする子どもが減少し、室内遊びをする子どもが増加したと言われている通り、表 1 の結果からも、そのような現状が読み取れる。幼児期の外遊びの減少は、児童期においての遊びに影響を与えていた可能性があると考えられ、また、外遊びは集団遊びと関連することから、幼児期から積極的に外遊びをすることが望ましいと考える。

そして、現在の大学生（女子）に対する調査結果を見ると、約 2 割（103 名中 22 名）の女子学生が、幼少期（小学校を卒業するまでの期間）における「一番好きだった（よくした）遊び」について、友だちと遊ぶ内容の遊び（集団遊び）を挙げていなかった。これらの女子学生は、環境的な要因により友だちと遊ぶ機会を多くもつことができなかつた、あるいは自ら積極的にその機会をもたなかつた可能性もある。いずれにせよ、2 割ほどの女子学生においては、幼少期に友だち（集団）と遊んだ経験が少ない可能性がある。

今回は、現在の幼児の遊びと、現在の大学生（女子）の幼少期の頃の遊びについて調査を行ったが、これらの結果から、やは

り子どもの外遊びや集団遊びの減少が非常に危惧される。

子どもの体力低下は、教師の運動に対する指導理念の持ち方により改善される可能性が高いと言われており<sup>16)</sup>、運動や遊びに対する教育者（大人）の意識が非常に重要なと考えられる。したがって、大人は、子どもにとっての遊びの重要性を十分に理解しておく必要がある。そして、その上で家庭・教育現場などにおいても子どもたちが、積極的に外遊びができるように、また集団遊びや異年齢の子どもたちとも遊ぶことができるような環境を整えていくことが重要であると考える。

遊びは、子どもの心身の発達に大きな影響を与えることから、今後も子どもの遊びに注視したい。そして、子どもの遊びに関する様々な問題について、より明確にしていき、それらに対する改善策を探っていく必要があると考える。

## 引用参考文献

- 1) 文部科学省 体力運動能力調査（[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/001/index.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/index.htm)） 2012.5.4 取得。
- 2) 田中沙織（2009）「幼児の運動能力と身体活動における関連について—5歳児の1日の生活からみた身体活動量を中心として—」『保育学研究』47(2), pp.8-16。
- 3) 内閣府（2011）『食育白書』、pp.44-45。
- 4) 村田芳子（2001）『体ほぐしが拓く世界』光文書院、pp.51-53。
- 5) 白石豊・川本和久・吉田貴志（2007）『どの子ものびる運動神経－小学生編

- 一』かもがわ出版、pp.14-15。
- 6) 中村和彦・植屋清見・宮丸凱史（1991）  
「肥満傾向にある幼児の動作発達水準」  
『体育科学』40(6)、p.815。
  - 7) 白石豊・広瀬仁美（2003）『どの子もの  
びる運動神経－幼児編－』かもがわ出  
版、 pp.10-14。
  - 8) 奥田援史・嶋崎博嗣・足立正（2008）  
『健康保育の科学』(株)みらい、p.74。
  - 9) 藤永博（2009）「幼児の運動技能と姿勢  
制御系の発達について—運動遊びの志  
向が及ぼす影響に着目して—」和歌山  
大学経済学会『研究年報』第 13 号、  
pp.1-30。
  - 10) 文部科学省（2008）『幼稚園教育要領解  
説』、フレーベル館、pp.32-34。
  - 11) 厚生労働省（2008）『保育所保育指針解  
説書』、フレーベル館、pp.42-53。
  - 12) 文部科学省（2008）『小学校学指導要  
領解説 体育編』、p.12。
  - 13) 佐々敬政・中島友樹（2012）「体育科  
における「遊び」の定義と実践におけ  
る有効性と可能性」『教育実践学論集』  
兵庫教育大学大学院 連合学校教育研  
究科 第 13 号、 pp.277-288。
  - 14) 柴谷久雄・森林（1996）『新版 遊びの  
教育的役割』、黎明書房、pp.10-12。
  - 15) 同上書、 pp.53-54。
  - 16) 柳田信也（2008）「幼稚園教師の運動遊  
びに関する指導理念の調査研究」『国際  
学院埼玉短期大学研究紀要』第 29 号、  
pp.21-26。

